

**吉田傑俊教授の学問研究の思想地平：現代社会の
哲学的把握と未来社会への展望：民主主義論・市
民社会論の展開**

著者	石坂 悦男, 卞 崇道, 高 淑娟
雑誌名	社会志林
巻	52
号	4
ページ	87-100
発行年	2006-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015373

吉田傑俊教授の学問研究の思想地平
現代社会の哲学的把握と未来社会への展望
——民主主義論・市民社会論の展開——

石 坂 悦 男
下 崇 道
高 淑 娟

(一)

はじめに

現代が直面する危機への理論的・実践的な関わりがありようが問われている。現代の危機への認識、それへの対処の観点と方法が問われている。1990年前後に世界史の大転換が起こった。既成「社会主義国家の崩壊」によるいわゆる「冷戦の終焉」である。この歴史的事件を画期として、資本主義による世界の再編成が急速に進んだ。それまで「社会主義国」であった国々が市場経済に参入し、自由主義と市場主義の原理に立脚した競争がたちまちのうちに地球規模に拡大した。いわゆる「グローバル化」である。現代の危機の新たなありさまは「グローバル化」によるものである。

自由主義と市場主義は、それまでの政治権力による支配と強制から市民を解放し、便利で効率的な社会に向かって進むものと期待されたが、官僚主義による機械的な計画経済の破綻に取って代わった資本主義は「カジノ資本主義」の様相を強め、「マネーゲーム化」が国境を越えてたちまち浸透した。その結果、現代資本主義の病弊がいっそう深刻の度合いを深めている。貧富の格差の増大、国際「紛争」の激化、核拡散、地球環境の悪化、世界貿易の不均衡の拡大、福祉国家の破綻、人権の抑圧、地域社会の崩壊、平等や公正の軽視、社会的弱者の切捨てなどなど。加えて自由主義・市場主義の競争を全面的に正当化する「理論」が跳梁している。

他方、自由主義・市場（万能）主義の下での「グローバル化」を批判的に捉えて、現代の危機の歴史的本質を的確に認識し、人間と社会の未来を展望する理論は後塵を拝している。これには既存「社会主義国」の崩壊とともに、それが依拠していた思想的理論的基盤であるマルクス主義が全面的に否定され、清算主義的に放擲されたことと密接に結びついている。それはまたその後の社会科学のあり方に不可避的に影響を及ぼし、批判科学が後景に退き、実利的な思考と理論が流行することになった。こうした事態の進展に自称マルクス主義者のほとんどが沈黙した。

人々はいま、「グローバル化」の進展に伴う現代資本主義の病弊がいよいよ深刻さを増すなかで、それへの対処のための確固たる思想と理論（それに基づく未来社会への展望）を見失っている。言い換えれば、現代資本主義を包括的に把握し未来社会を展望しうる普遍的理論（グランド・セオリ

一) が求められているのである。そうした普遍的理論として、資本主義の全体的止揚の観点と方法を示すマルクス思想と理論の発展的再構築は、依然有力なもののひとつである。

ところで、このような視点からマルクス主義思想と理論をその再吟味・再検討を踏まえて発展させ、現代(資本主義)の危機への対処を思想的理論的に追究し、人間による自然と社会の最終的支配と制御の方向を示す、未来社会を展望する思想と理論を構築する最も有力な実践者の一人に吉田傑俊教授がいる。教授のご退職を機にその思想的理論的営為に注目し、その業績を改めて振り返っておきたい。

吉田教授の学問研究は、詳しくは後に譲るが、民主主義論・市民社会論の展開を中心にマルクス思想と理論の再検討・再構築におかれている。吉田教授は既成社会主義国家の崩壊の事実を前提した上で、それを契機としてマルクス思想・理論についての再検討・再構築の理論的作業を展開している。そしてマルクス思想を民主主義・市民主義・社会主義という連関において再把握し、そのような作業を通じて、既成「社会主義」が民主主義を失ったがゆえに崩壊した(少なくともその重要な要因のひとつ)と捉えたのである。吉田教授によれば、「マルクスによる社会主義は、なにより〈国家〉主義に反対する〈社会〉主義であり、〈社会〉または〈市民社会〉の高次な発展形態の実現である」。吉田教授は、マルクスの「重層的市民社会論」の再構築を探求している。それはマルクス思想・理論研究に新しい視点を導入した創造的な研究であり、現代市民社会の課題に応える実践的研究である。ここで、こうした吉田教授のマルクス思想・理論の再構築の研究足跡を、その前期(1980年代末まで)の業績については、(二)の「唯物論の現代における意義と方法」で、その後期の業績については、(三)の「新しい市民社会論の構築」で、それぞれ論及する。

(石坂悦男)

(二)

唯物論の現代における意義と方法

吉田傑俊が携わっている学術研究は、その研究内容を三つの時期に分けることができる。

第一時期(1969-1975)は、主にヘーゲルとマルクスの哲学思想を研究し、マルクスのヘーゲル客観的観念論に対する批判的改作を重点に検討し、しかも社会史の角度から彼らの近代市民社会観を研究した。この時期において、吉田はさらに日本思想史および唯物論思想にも強い興味を示した。

第二時期(1976-1980)は、唯物論の現代における意義と方法を重点に考察するとともに、この方法を用いて近・現代の日本イデオロギー形態に対する分析と批判を行った。1976年、吉田は西ドイツ(当時)の留学から帰国後、ヘーゲルなどのドイツ古典哲学を研究していたにもかかわらず、外国での生活経験と思索を通して、彼は思想や理論に対する国民性とくに伝統的な認識を高めることができ、自国の思想を研究する必要があると強く感じると共に、唯物論の実践機能に対する認識をさらに深めて行った。思想上の変化は、吉田を研究の目標をドイツの哲学から本国の哲学—日本近・現代のイデオロギー形態に対する批判—に切り替えさせたのである。

第三時期（1980—現在）は、日本近・現代のイデオロギー形態に対する分析と批判を行ったうえで、唯物論を武器として、戦後の日本イデオロギー状況に対して集中的に独特な研究を行った。

以下は上述の三つの時期を中心に、概略的に吉田傑俊の学術思想と理論を紹介する。

まず、第一期のヘーゲル哲学思想とマルクス哲学思想についての研究であるが、吉田は数多くの論文の中で、マルクス主義哲学の形成過程における、ヘーゲル哲学の止揚について言及した。その中で、論文「労働と疎外——ヘーゲルとマルクスにおける形態」¹⁾は、ヘーゲルとマルクスにおける「労働」と「疎外」概念の、連続性と非連続性を明らかにした。ヘーゲルは『精神現象学』において、自己意識の運動の中で「労働」という概念を持ち出したが、彼は人間と自然の関係から「労働の本質性」を語りながらも、一方では「対象化—疎外—疎外の克服」という図式によって「労働の現実性」をさらに明らかにできなかった。吉田は、マルクスがヘーゲルの「労働の本質性」を継承するとともに、「労働の現実性」をも明らかにしたと考え、後者はある歴史段階において発生する「疎外化された労働」であって、その止揚の意義についても指摘した。論文「歴史的なものと理論的なもの——ヘーゲル《論理学》本質論についての一考察」²⁾では、吉田はヘーゲルの「概念的認識」の意義とマルクスのその唯物論発展の成果を考察することによって、ヘーゲルの「本質」は、存在と概念を媒介するものと指摘した。一方では、本質は存在の矛盾を克服し、存在を自己に含ませるが、他方では、自己の観念性も確立する。すなわち「本質」は、存在の批判性の再構成でありつつ、概念的認識をも形成させるものでもある。したがって、實在（歴史的なもの）はすっかり論理に包摂されてしまうのである。マルクスはヘーゲルのこの方法を批判的に止揚し、『資本論』にみられるように、抽象から具体への過程は観念上の再構成方法とすることによって、歴史性と論理性を真の意味での統一を実現させた。吉田はその意義を明らかにしたのである。

論文「市民社会と私的所有の問題——ヘーゲル『法の哲学』の一考察」³⁾では、吉田はマルクスのヘーゲルに対する批判を手掛かりとして、ヘーゲル『法の哲学』の「市民社会」から「国家」への移行に関わる理論とその思想的意義を考察した。すなわち、ヘーゲルの「市民社会」はロック以来の自己労働＝自己所有の理論を基礎にするが、国家はこの私有制原理が独立化した政治体系である。それゆえ、市民社会から国家への移行は、近代ブルジョア的私的所有原理の物象化、疎外化として把握することができる。即ち、この転換過程は、市民を主体とする「自己労働＝自己所有」の市民社会から、「独立した私有財産＝資本」を主体とする資本主義社会へと移り変わらせる論理の過程と見なすべきとした。

論文「若きヘーゲルの理念と現実——啓蒙主義とロマン主義の克服」で、吉田は、青年ヘーゲルがキリスト教とドイツ観念論の先駆者を批判することによって、理念と現実とを統一する絶対観念論を形成したが、それは当時における啓蒙思想とロマン主義への止揚過程であると把握した。すなわち、ベルン時代におけるヘーゲルのキリスト教に対する研究は、カントのドイツ啓蒙主義的抽象性と非歴史性を超越したものであることを明らかにしている。また、フランクフルト時期の「キリスト教精神と運命」の中に現れた「全体性」概念の形成は、哲学のロマン主義を克服し、個別と全体、主体と客体、特殊と普遍の真の意義での統一を実現することができたこと、またイエナ大学時

代の「弁証法的理性」の確立過程は、『ドイツ憲法論』、『人倫の体系』などの現実的理論と対応しつつ、ヘーゲル「絶対観念」の形成過程となったことを明らかにした。

70年代後半、吉田は唯物論の現代的意義および日本近・現代イデオロギーに対する批判などの問題をめぐって、数多くの論文を書きあげた。1980年に、彼はこれらの論文を本にまとめて『唯物論と日本イデオロギー』を出版した。これは彼の第二時期における研究成果で、全書は大きく三つの部分に分けられる。

第一部の「唯物論とイデオロギー」は、「現代唯物論の立場と課題」と「イデオロギーとしての唯物論の立場と課題」の二論文からなっている。前者は、複雑な現代状況のなかで、唯物論の現実的な問題に対する選択と解決に向かう観点を強調するとともに、そのためには唯物論の伝統を、とくに戦前唯物論者から学ばなければならないと指摘した。この観点から吉田は、哲学の基本問題、すなわち物質と意義との関係は決して抽象的な理論問題であるだけでなく、労働過程や現実的人間生活の基礎の上に建てられた問題であると指摘した。したがって、現代唯物論の発展は、現実的実践性の方向を取るべきことをと明らかにした。第二篇の論文は、さらに現代唯物論課題は「理論的・科学的側面」（認識論、論理学など）と同時に、イデオロギーの「現実に対する批判的認識」という機能を回復しなければならないことを強調すべきとした。吉田は、イデオロギーに対する批判は狭義の「哲学闘争」に限定しない、広義の伝統的・日本的思考様式や民衆意識におくべきで、その対象は近代的な矛盾を孕む「日本の現実」にあると考えたのである。

第二部は近代日本の政治家や思想家の思想を探求することによって、日本近代化の特殊性およびその意義を明らかにした。その中で、論文「西郷隆盛と近代日本」は、西郷の「敬天愛人」思想を研究した。この思想は通常「革命的」「反動的」両側面から評価されるが、吉田によれば、西郷のこの士族精神は歴史的限定性と倫理的普遍性をともに持っている。そして、西郷の「士族反逆」の悲劇は、絶対主義による「上からの近代化」を実施しなければならない近代日本自体の矛盾を反映していると指摘した。論文「森有礼と日本の啓蒙思想」において、森有礼はその前半生は「明六社」を中心に啓蒙主義者として存在していたが、後半生になって国家主義者になった思想転換過程とその意義を分析することによって、「文明化と倫理」の分裂した日本の啓蒙主義（絶対主義的な上からの啓蒙）の歴史的・思想的位置を明らかにした。「近代日本における哲学思想の展開」は、西洋思想の受容と主体的摂取の確立から、自由民権思想家中江兆民、アカデミー哲学者和辻哲郎、反ファシズムの唯物論哲学者戸坂潤などの思想を紹介することによって、近代日本における哲学思想の発展過程を考察した。とりわけ中江兆民の西洋思想の主体的摂取、和辻哲郎の「ゲマインシャフト的日本」に向けての受容、戸坂潤のマルクス主義の日本における現実化形態を客観的に分析することによって、日本哲学の今後の発展方向を示すことができた。

第三部は、戦後日本の思想的考察とイデオロギー批判などの論文からなる。彼は「戦後思想序論」の中で、戦後日本は民主主義思想の形成時代であると指摘しつつ、民主主義思想と国家主義イデオロギーとの対立闘争を主な手がかりとして、戦後の思想界における状況を分析した。その中で特に戦後精神の原型たる「市民的民主主義」の意義と限定性、国家イデオロギーを復活させる基盤

や民主主義発展の方向性について検討した。「公害認識と反対運動の思想——石牟礼道子氏批判」の論文は、公害活動の摘発に専念する石牟礼の思想を分析することによって、公害に対する「非理性的」認識と公害運動に取り組む倫理的「普遍性」との矛盾とその思想発展の方向を提起した。『近代化』と日本の問題——江藤淳氏の「新保守主義」批判』では、吉田は戦後に国家主義的近代化論を主張する江藤の思想を批判している。江藤は、夏目漱石、小林秀雄などへの評価を通して、彼らを「公」と「私」とを結び付ける「反近代的」近代人として理想化した。さらに「反安保闘争」後のアメリカ留学を通して、江藤の国家意識は拡大したと指摘している。従って、吉田は、戦後日本の近代化過程を日本的伝統の欠如と理解することによって、国民の民主化への努力に逆らう江藤の思想と観点を厳しく批判した。

80年代は、吉田の研究の第三期であると言ってよかろう。この時期のすぐれた成果は、論文「現代知識人の展望—近代日本知識人の課題をとおして」（『現代のための哲学』3収録（1982）、「戦後『啓蒙主義』の危機と再生の問題」（『思想と現代』1985年第2号収録）、著作『戦後思想論』（1984）と編著『現代の日本の思想』（1988）であろう。

現代日本の知識人の思想状況を解明するため、吉田は「現代知識人の展望」のなかで、近現代日本における代表的な知識人の思想を全面的に検討した。彼は、近代日本形成期において近代化の方向を設定した福沢諭吉、その後の絶対主義的政治体制に批判的に対処した三木清、および戦後の民主化を実現するために参与した丸山真男を考察することにより、これらの主体的思想家が関心を寄せた共通課題は、日本に「西欧的近代化」を実現させることだと指摘した。しかし、彼らの思想にも限定性があった。その原因を、吉田は主に次のように考えている。①「西欧的近代」を直接に「前近代的日本」に接合したこと、②アジアまたは民衆の観点から日本を分析しなかったこと、③日本を西欧化する時、その主体を国家に設定せざるを得なかったことなど。以上の分析を通して、吉田は、現代知識人の任務は、すでに日本と西欧で実現した共通の「近代」（即ち資本主義的社会）を止揚することであり、この仕事は、まず戦後日本憲法が体现した近代原理に対する批判から始めなければならないと指摘した。

「戦後『啓蒙主義』の危機と再生の問題」の中で、吉田は、かつて戦後日本憲法に体现した平和と民主主義の実現のため努力してきた戦後啓蒙主義は、西欧的な「近代」と市民を確立することを目標としてきた。60年代以来、資本主義的近代化の急速な発展により、その作用はしだいに弱まったと指摘する。それに代わる体制的知識人が「大衆社会」や「高度産業化社会」を完全に肯定する立場に立って、啓蒙主義に対して激しい攻撃を行っている。しかも、この攻撃は戦後民主主義体制に対する攻撃と同時に行われているため、今日の啓蒙主義はその近代的限定性から脱出する必要があり、近代社会の矛盾対立のなかで自らを再生させる必要があることを指摘した。

『戦後思想論』は吉田の重要な著作の一つである。本書は40年にわたる戦後日本思想界の発展と歴史過程を有機的に結びつけ、それを特色ある思想発展史に成立させた。本書は戦後思想の代表の一つである唯物論哲学や唯物主義論者を直接の考察対象にはしなかったが、本書の観点は確かに唯物主義の立場に立っている。この本は5章から成っている。第1章「戦後思想原理及びその展開」

では、吉田は戦後思想原理を「反戦、平和と民主主義」と規定し、同時にそれを「変化する歴史段階における内在発展過程」と捉えている。彼は、戦後思想の課題はいかに近代化を実現するかの問題と、いかに近代を止揚するかの問題の拮抗にあると指摘している。すなわち吉田は「近代の超克」か「近代の止揚」かは、近代から現代にわたる過程を克服する観点で重要な相違が存在すると指摘すると同時に、戦後思想の発展を民主主義思想から国家主義思想そして国際主義的思想への弁証法的展開がこの時代の全発展過程であると規定している。第2章においては、戦後初期の民主主義思想の位置と意義を明らかにし、その積極性および時代的限定性を重点に示した。彼は、民主的思想の代表である丸山真男は西欧近代民主主義思想を規範として、戦前の「前近代日本」を厳しく批判したと指摘している。竹内好は「脱亜入欧」を目的とする日本近代化を反省し、丸山と一緒に戦後日本民主化の建設と、独立精神をもつ民衆を培養することに力を入れた。かれらの啓蒙主義活動は戦後初期の民主改革において積極的な役割を發揮した。60年代以後、日本の資本主義近代化をもとに再興したのが国家主義的思想である。その代表者の一人は、戦前日本の伝統的なイデオロギーの継承者たる小林秀雄である。吉田は、小林は晩年「本居宣長」の研究に専念するが、「反理論・反規範・非政治」の意義において伝統的色彩を持つ「日本自然主義」の思想路線を信仰し、すでに否定された戦前価値観を戦後に再興しようとしたと指摘した。また、吉田は、戦後の価値観を戦前に復帰させようとする江藤淳についても批判的考察を行った。戦前日本に対して江藤は批判的評論から始まっているが、後に、彼は一方では日本の政治、経済の復活と発展を肯定しながらも、他方では急激に進む近代化に「日本固有の伝統の喪失」を嘆息する。これは江藤の「近代の超克論」を矛盾に陥らせた、と指摘する。

第4章において、吉田は近代自身と対抗する思想の一つが、民主思想を基礎とする国際主義思想であり、その代表的な人物は森有正と加藤周一であると指摘している。森有正は長期間にわたるヨーロッパの生活経験を持っており、独特な「経験思想」を形成した。彼は「経験はすなわち外界における事物の秩序」⁴⁾であり、主観的自覚と世界の客観的実在性から構成され、それが言語を媒介として人間すべての連帯を絶えず深く拡大するものと考えている。この思想に基づいて、森有正は西欧人の意識的「経験」思想に対して、日本人の経験は「同化的体験」であると考えている。森有正はこれに対して批判的把握を行い、戦後の民主化が「同化的体験」を変容することを希望する。もう一人の代表人物は加藤周一で、彼は「雑種文化論」を主張し日本文化を「雑種文化」とみなす。それにより、彼は戦前の「日本主義的」知識人と戦後の「近代主義的」知識人を批評し、戦後民主化の基礎を雑種文化の方向に置くことを提起した。加藤はさらに、日本人の世界観の形成は「土着的世界観」から「外来思想」の「日本化」への変容過程であると考えている。吉田は、今後どのような思想を「日本化」すべきかが森有正や加藤周一の継承者の研究課題であるという第5章において、戦後思想の発展に伴い今後の理論課題を設定した。即ち、1. 近代化の観点を民主化の方向に変革・止揚する方法は何か。2. どのように日本の伝統的なものと対応するのか。3. 日本の世界における地位をどのように確定するか。そして、この理論研究の方向はすでに過去の「近代の超克」論ではなく、「近代の止揚」論にあり、この事業は「戦後理念の定着と発展を目指した国民的实践にお

いて、すでに新しい思想形態をとっている」と、吉田は指摘した。

『現代日本の思想—伝統と転回』は吉田による編著で、その目的は日本の伝統とその転換の問題を明らかにすることにある。前書きの中で、吉田は「いわゆる『伝統』的思想形態とは、戦前日本とくに天皇制絶対主義国家に包摂された、未熟な『市民社会』の中の思想やイデオロギーであり、『転換』の形態とは、戦後日本とくに『高度経済成長』以来、急速に形成した『市民社会』的現実下の思想やイデオロギーを指す⁹⁾と指摘する。本書の第1章「変革主体像の展開と課題」は吉田によるもので、彼はここで日本近代化の過程で中核となる「変革主体」—知識人と民衆の問題を十分に考察した。彼はまず、なぜ戦前に「市民」の形成を中心とする「市民社会」が確立しなかったかという問題を分析し、その原因は福沢諭吉と中江兆民による市民的主体が二側面、すなわち「経済主体」と「政治主体」の分離にあると考える。次に、彼は「存在」と「規範」の媒介の必要性という角度から、戦後市民社会の形成過程において、丸山真男や松下圭一などによる「市民社会派」が主体を「市民」と「大衆」に設定し、マルクス主義の提起する「階級」的主体と対立する問題を検討した。最後に、今日の主体形成の問題として、彼は日本の経済・政治・生活形態の変化にふさわしい階級闘争の多様化やその主体に内在化するべき規範形態を指摘した。

吉田傑俊の哲学研究は、三つの時期を経て、今日その着眼点を日本の思想発展の考察に置き、マルクス主義の観点と方法を運用して、大いに成果のある仕事をやり遂げている。彼は目下、日本哲学研究の現況は大きく四点にまとめることができると考えている。即ち、①その研究主体は大学に所属する研究者で、主な研究対象は西欧哲学である。戦前、多くの人々はドイツ古典哲学（カント、ヘーゲルなど）を中心に研究したが、戦後は英米の分析哲学・実証主義を研究するようになった。最近では、フランスの「構造主義」「ポスト構造主義」などの研究が増大している。日本の学会には批判的・自主的研究を欠如させ、翻訳と紹介を主とする傾向がみられる。②他方、最近ジャーナリズムやアカデミーの一部の人々は、哲学・文化・社会などの理論分野において「近代の超克」論を持ち出している。これは核戦争の危機、エコロジー問題など人類の生存問題が深刻に生起し、人々が観念的に近代から離反しようと思うからである。さらに、それは「豊かな」市民社会（資本主義社会）で落ち着いて生活し、それを享樂する思想が出てきたからでもある。③日本の経済力の発展に伴って、「京都学派」を中心に「国際日本文化研究センター」が設立され、日本文化の特殊性と普遍性の研究に力を入れている。吉田は、この日本文化研究が排他的・国家主義的になれば危険だと考える。④現代において人類は数多くの問題に直面しているが、日本は物質的・文化的・精神的な生活において本当に豊かな程度に達したのかを、考察する必要がある。

具体的・現実的なこのような問題を研究し、考察する思想家の数は日本にもそんなに多くはない。ただし、少なくとも「唯物論研究協会」の研究者たちはこのような問題を研究方向とし、少なからぬ会員がそのために努力をしている。吉田自身もこの「唯物論研究協会」の主なメンバーとして、マルクス主義の哲学路線に沿って創造的な研究を行っている。吉田のような有能な中堅哲学者は、今後きっと豊かな成果を取めることができるであろう。

(高 淑娟)

【注】

- 1) 神戸大学文学部『研究』, 第43号, 1969年。
- 2) 『鹿児島大学教育学部研究紀要』, 第23号, 1972年。
- 3) 『唯物論』, 第4号, 1975年。
- 4) 吉田傑俊, 『戦後思想論』青木書店, 1984年, 181頁。
- 5) 吉田傑俊, 『現代日本の思想』(まえがき), 梓出版社, 1988年。

(三)

新しい市民社会論の構築

1. 市民社会論への接近

吉田氏はヘーゲルとマルクスを前期の研究重点において行なってきたが、その研究の中ですでに市民社会論に触れていた。たとえば「市民社会と私的所有制の問題——ヘーゲル『法哲学』の一考察」という論文で、吉田氏は、ヘーゲルの市民社会論を批判的に考察し、また『現代日本の思想』(1988)では、1960年代以降の日本社会の問題を分析したうえで、現代日本がまだ未成熟な市民社会であると指摘した。しかし、1980年代までは、市民社会問題は吉田氏の研究課題の重点とはなっていなかった。

周知のように、1989年から1990年代初期までの間に旧ソビエトをはじめとする東ヨーロッパの既成「社会主義」国家は続々と崩壊したが、これは国際共産主義運動史上の重大な事件だけでなく、人類社会史上の重大事件でもあった。この事件は世界の思想界に大きな影響を与えたにちがいないが、他方では、「社会主義の終焉」やマルクスを「死んだ犬」として扱う主張などが一種の流行となったし、マルクス主義の内部でも一部の学者はマルクス思想の真理性に疑惑を抱き始めた。にもかかわらず、マルクス思想の真理性を堅持している学者は、前述のような俗流的学者の論調を批判しながら、その「事実」を認めたいとそれを契機として、マルクスの思想やマルクス主義について積極的方向での再吟味や再検討の理論作業を展開してきた。吉田氏はそのような立場をとる学者の一人といえる。

吉田氏のマルクスの思想を再吟味する理論作業は、マルクスとハーバマス思想を対比しながら展開され始めた。『ハーバマスを読む』に収録された論文「ハーバマスとマルクス」の中で、吉田氏は「マルクスの思想は、『近代』という時代の本質的な把握のうえにその根本的な止揚の方向を示すものである。マルクスの思想のこの本質は、既成社会主義の崩壊という事態にもかかわらず、変わるものでないと私は考える」¹⁾と表明した。この基本的な思想的立場に立ち、「労働と相互行為」論及び「システムと生活世界」論を重点として、ハーバマスの思想をマルクスの思想との交叉と対比において両者の関係と意義を明らかにした。まず「労働と相互行為論」について、ハーバマスは、マルクスの協働概念における生産と交通の統一に対して、労働と相互行為の分離を提起することによって、その独自の現代思想の地平を拓いた。吉田氏によれば、ハーバマスはヘーゲルにおける

「労働と相互行為」思想を批判することによって、マルクスの労働と相互行為の連関をも批判し、マルクスを一元的労働史観と規定した。つまり、ハーバマスは、マルクスが人間の基本的活動を生産と交通と捉えそれを協働の不可分離的な二契機とした観点を批判し、労働と相互行為の区別を強調したのである。そして、彼は「目的合理的行為すなわち労働」と「記号に媒介される相互行為」たる「コミュニケーション的行為」という二つの普遍的行動類型を「社会の制度的枠組」と「目的合理的行為のサブシステム」という二つの社会体系を提示した。この人間の二つの行為類型とそれにもとづく二つの社会体系への分類化は、後の「システム」と「生活世界」の概念に発展されると、吉田氏は指摘した。

この生活世界とシステムのシェーマは、マルクスの市民社会と国家、土台と上部構造を転換すべきものとして設定されたのである。ハーバマスの生活世界は、コミュニケーション的行為のすなわち広義の「相互行為」の現場であり、マルクスの市民社会または土台は「生産と交通」の世界であったが、それは後に「必然的な、意識から独立した」「生産諸関係」に集約されるものである。さて、ハーバマスのシステムは、相互行為を生活世界から分断するものとなる。つまり、ハーバマスは、生活世界からのシステムの成立を、生活世界の「合理化」であるとともに「技術化」と捉え、システム統合による社会的統合の駆逐を生活世界の「植民地化」と規定したのである。概して、このシステムと生活世界は、社会進化的展開の二契機であるゆえに並列的な柔構造であるのに対し、土台と上部構造は自然史的発展を遂げる規定一被規定の縦構造であると、吉田氏は指摘した。ハーバマスのマルクス批判を分析したうえで、吉田氏は次のように再度概括する、「マルクスの思想地平は、近代市民社会すなわち資本主義の革命的変革による『社会主義』の樹立にあり、ハーバマスのそれは、近代市民社会とくにその後期資本主義の危機に対する相互行為の回復を媒介とした『市民的公共性』の再興にある」²⁾のである。ここにはマルクスとハーバマスの大きいな相違がある。「社会主義国家の崩壊」の原因は、すでに、その内部の「市民社会」や市民に対する抑圧や強固な官僚主義による機械的な計画経済などの要因があるかぎり、ハーバマスの提起は一定の重要な現代的意義をもつ。しかし、ハーバマスの思想は、マルクス思想を実際には現代的「段階」において補完し展開するものであり、それをもってマルクスの思想に取って代わるのは不可能である。逆に、真にマルクス思想を継承・発展するマルクス主義がこれを思想観点や方法において包摂することは可能であり、ハーバマス思想の成果の一つはむしろそこにかかっているといえよう、と吉田氏は考えたのである。

2. マルクスにおける民主主義・市民社会・社会主義の研究

吉田氏のハーバマス研究は結局マルクス研究にあると、私は思う。『マルクス思想の現代的可能性』は氏の研究の重要な成果である。ここで、吉田氏は、マルクス自身の思想を、民主主義・市民社会・社会主義という連関において再把握することによって、従来の「社会主義」と一体化した「マルクス主義」的通説とは異なる考えを提出した。

まず、吉田氏は、ここではじめてマルクス思想において二つの歴史観が存在するという見方を提

示した。「私見によれば、マルクスの社会主義像は、彼の歴史観の射程や視角において異なった内実、立体的に交叉した二つの様相が存在する。」³⁾それは「市民社会史観」と「階級社会史観」である。この問題についてはここではまだ言及しないが、後で『市民社会論』に触れるときに再度論じたい。ただここで指摘したことは、マルクスの社会主義が、なにより「国家」主義に反対する「社会」主義であり、「社会」または「市民社会」の高次の発展形態の実現であるという規定はまったく新しい論点である、と思う。従来のマルクス主義がマルクスの階級社会史観の側面と市民社会史観の側面の結節ではなく、前者の後者に対する強調また優先性が、一党独裁的・官僚支配的な「国家」主義的社会主義の形成とその崩壊にまで帰結したと捉え、吉田氏は、既成社会主義崩壊の一番深刻な原因を鋭く暴き出したのである。

さらに、民主主義の欠如こそ国家主義的社会主義崩壊のもう一つの原因であった。吉田氏は、マルクス初期文献において、マルクスの民主主義観がいかに形成され、それがどのような特性をもつのかという問題を考察した。マルクスはその最初期に、民主制（国家）と「政治体制」としての国家を峻別し、民主制は「国民の体制」自体であるが、政治体制としての国家は現代の市民社会において形成されると解明した。そして、彼は近代市民社会を国家に止揚せんとするヘーゲルを批判したうえ、直接民主主義体制を主張した。これはルソーの思想を継承したにはかならない。しかし、まもなく、マルクスは近代民主主義への批判と新たな民主主義の主体形成を提示したが、それは国家と近代市民社会の分裂・対立を市民社会そのものの本性にあるという認識に達したからである。

つまり、マルクスは、ルソーがすでに指摘していた「公民」と「私人」の分裂の事態を、「政治国家」と「市民社会」の并存という近代の必然性において根拠づけたのである。その上で、それを近代民主主義の不完全性に帰結させ、さらにこの不完全性の批判は、公民の権利と人の権利すなわち人権の区別として展開される。公民権は政治的自由権つまり国家制度への自由・平等に参加する権利であるが、それと区別された人権は市民社会の成員としての「人間」すなわち「利己的人間」の権利である。したがって、「政治的解放」のみではなく、「人間的解放」が為されるべき意味が現れる。そして、この人間的解放すなわち新しい民主主義の担い手はプロレタリアートである、とマルクスは考えた。つまり、「労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級の地位に高めること、民主主義をたたかいとることである」。

この観点から、マルクスの社会主義・共産主義は形式・内容ともに「部分的」であった近代民主主義を止揚し、まさに民主主義＝「民衆の支配」を現代に実質的・全面的に具体化する思想であり理論であると、吉田氏は指摘した。そして、氏は、さらに階級と市民、階級社会史観と市民社会史観の連関性という問題を抽出することになった。

3. マルクス市民社会論の再構成

以上のように、市民社会理論についての長い研究を行った吉田氏は、その研究成果を集約された大著『市民社会論——その理論と歴史』に集約した。「はしがき」で、吉田氏は「私はヘーゲルやマルクスの研究からはじめて、今日まで民主主義論や市民社会論について研究を続けてきた」

「本書は、こうした現実的課題に対して、私が自分の研究領域を接合しようとする意図のもとに書かれたのである」と記した。たしかに、この大作で吉田氏はそれまでの市民社会についての研究成果をまとめたものであるから、理論問題の系統性や現実問題の鮮明性などの面で、読者としての私に深い印象を与えた。ここでは、第一部の「市民社会論の理論的問題」を重点にして検討したい。

市民社会論は古代から現在に至るまで多様な展開をしてきたが、〈現代的〉市民社会論はどのような特質と意義そして限定性をもつであろうか。これについて、吉田氏は、J・キーンとJ・ハーバマスの市民社会概念規定を検討し始め、ドイツ、アメリカ、イギリスにおける〈現代的〉市民社会論の理論状況を検討したうえで、〈現代的〉市民社会論の意義と限定性についてE・ウッドの見方を肯定しつつ次のように要約した。それは、第一に、既成社会主義の崩壊とその後の東欧「市民革命」への肯定的対応にあり、第二に、新自由主義による世界の市場席捲に対する一定の対抗であった。だが、その理論的特質は、〈国家〉と〈市場〉から独立した第三領域としての〈市民社会〉を構成する。つまり、その展開は国家と市場の範囲内の運動に、または現存システムの許容内での運動にとどまることであり、また現代的市民社会こそ資本主義的国家と市場を構成するという、マルクス主義への意識的対抗が意図されていることにある。このような理論的限定性は、今日の国家に支援された市場至上主義的〈グローバル化〉の進行のなかで、内外ですでに明らかになりつつあると、吉田氏は指摘した。

市民社会論の意義と限定性を検討したうえで、吉田氏はさらに市民社会論の歴史的系譜とその概念を整理し確認した。そのうえで、氏は、マルクス市民社会論の理論再構成を展開した。まず、従来のマルクス研究の課題を、次のように指摘した。「従来、マルクスは階級社会または階級闘争論の理論家とみなされているが、そうであるだけでなく、彼は一貫した市民社会論の理論家でもある。彼の理論的出立点がヘーゲルの市民社会と国家の問題にあったことはすでに確認したが、その後も、市民社会概念と階級社会概念を中軸とした歴史観を形成し、近代ブルジョア的社會、国家そして将来的協同社会についての総体的理論を樹立したのである」⁴⁾。つまり、吉田氏は現在に至るまでのマルクス研究において、空白に近い市民社会論を再検討し再構築しようとしたのである。

吉田氏によると、マルクス思想においては二つの歴史観が存在する。すなわち市民社会史観と階級社会史観である。前者は、協同的な生産と交通の発展を主軸にした、「古い市民社会—近代市民社会—協同社会」という歴史観であり、後者は、歴史の「階級対立」を主軸とした、「階級社会—階級社会の最終形態としての近代ブルジョア的市民社会—協同社会」という歴史観である。しかし、この二つの歴史観は対立関係にあるのではなく、対象への視角を異にするものであり、いわば「補完」関係にある。つまり、同一対象としての近代社会は、その視角によって異なった性格で捉えられている。しかし、異なった実践的方途を通じて同じ目標「協同社会」に達するのであり、それは社会の疎外物としての国家の市民社会への「再吸収」の方向と、ブルジョア国家の「打倒・転覆」の方向である。吉田氏は、このことを確認した上で、マルクスの重層的市民社会論を展開した。

マルクスの重層的市民社会論の構造とはなにか。吉田氏はまず市民社会概念についての重層的規定から論述し始める。マルクスのテキストから市民社会 (bürgerliche Gesellschaft) についての

概念規定が多くの個所が引用され、多義な規定が示された。それは、市民社会の歴史段階的区分規定と市民社会を異なった概念で示す概念的定義の区分である。そして市民社会の歴史段階的区分は、歴史貫通的な〈土台〉としての市民社会、〈近代的ブルジョア的〉市民社会と〈将来社会〉における市民社会という三つの段階を区分し、これら三様の市民社会論が示すものを確認する。吉田氏はまず歴史貫通的な〈土台〉としての市民社会論を検討したが、「歴史貫通的市民社会は、〈生産諸関係の総体〉たる〈土台〉としての市民社会と、その土台に〈対応〉し〈制約〉される〈社会的・政治的および精神的生活過程〉たる〈上部構造〉市民社会として、区別され複合されることになったのである」と、指摘した。そして、〈近代的ブルジョア的市民社会論〉は、マルクスの市民社会論の主軸を成すものである。だが、近代ブルジョア社会も一つの歴史的個体であるかぎり、この〈土台的〉市民社会に垂直的に貫徹される。近代ブルジョア的市民社会も、最も発展した段階としての市民社会として、自らの土台に対応する固有の上部構造をもつ。それは〈社会的・政治的・精神的生活過程〉としての上部構造である。その上構造の土台は、「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入る。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台である」(マルクス『経済学批判』序説)。

最後に、マルクス市民社会論の第三層というべき、アソシエーションすなわち〈協同社会〉としての市民社会論である。初期の段階では、マルクスは、「市民社会史観」において、協同社会を協同的な「生産と交通」の発展を主軸にした「古い市民社会—近代市民社会—協同社会」という歴史観において規定し、また階級社会史観においては、歴史の「階級対立」を主軸として、「階級社会—階級社会の最終形態としての近代〈ブルジョア〉的市民社会—協同社会」として規定した。中後期には、マルクスは現実世界の発展と連関において協同社会論を展開してきたが、それはまず「人格性」としての協同社会論を展開する。この点で人類史の第三段階である協同社会の段階が、「普遍的に発展した諸個人」がその「社会的諸関係」を自ずと「共同体的諸連関」に服属させると規定したのである。そこから、協同社会の形成主体すなわち階級と市民の問題を展開する。ルソー・ヘーゲルを批判的継承したうえで、マルクスは、階級社会史観において、資本主義社会の変革主体は明確にプロレタリアート階級であると規定し、また市民社会史観におけるその変革主体としての市民は、階級とともに来るべき〈協同的〉市民社会の担い手たる普遍的力能をもつ市民と規定した。つまりマルクスの階級概念はまず経済的概念として成立し、政治的概念に発展された資本主義社会の変革主体であるが、それはまた、階級社会とともに終焉する歴史的概念である。また現代社会において、労働者階級はすでに市民社会の成員として市民でもあり、ますます〈普遍的〉市民の概念が要請されている。それゆえに、現代社会の変革主体としての階級は普遍的力能としての市民性を必要とし、将来社会の主体としての市民は実践的・変革的能力としての階級性を急務とする、つまり市民性と階級性の結節の視点が現代に不可避であると、吉田氏は指摘された。

以上のような吉田氏によるマルクスの重層的市民社会論の再構築は、これまでのマルクス思想研究にない新しい見方であろう。この研究はマルクス思想に対しての理論的創造性研究であり、また

現代市民社会にいかに対処するかの実践的研究でもあると、私は思う。

4. 日本の市民社会論の考察

吉田氏は社会的関心の高い研究者であり、いつでも理論と現実との接合において真理を追求している学者であると思う。私見によれば、氏の学術思想には大まかにいって二つの道があるが、その一つはマルクス主義理論自身についての理論研究であり、もう一つは現代社会の現実問題についての理論研究である。氏は、市民社会論でもそうであるが、理論上でマルクスの市民社会論を研究しながら、現実の日本の市民社会論を研究してきた。

吉田氏は『マルクス思想の現代的可能性』で、現代日本の民主主義と社会主義の状況と課題を分析し市民社会構築の意義を指摘したが、『国家と市民社会の哲学』では丸山真男を中心として現代日本の「国家と市民社会」問題の成果と課題を分析した。そして『市民社会論—その理論と歴史』では、戦後日本の市民社会論の展開を評論した。日本の場合、本格的な資本主義的近代化は戦後から始まるのであったが、「この戦後時代も、初期の『民主化』（これについても、さしあたり国民または民衆主体の近代化の徹底またはその止揚の過程と規定しておく）に向かう短い時期を経て、いわゆる高度経済成長によるブルジョア的市民社会の形成に向かった」と、吉田氏は規定した。氏によれば、日本の市民社会は未成熟であるが、その過程で、あるべき市民社会確立を期して、多様で優れた市民社会論が構成された。

戦前の福沢諭吉と和辻哲郎の市民社会論を紹介し批判したうえで、吉田氏は戦後日本の市民社会論を重点に次のように検討した。戦後初期に、憲法理念を主軸として、日本の「民主化」の方向を推進した二つの思想潮流は「近代主義」とマルクス主義であった。日高六郎の規定によれば、前者は、民主主義革命が過度的なものとしつつも、「近代的市民的精神の確立」を「目的それ自体」としたが、後者は、民主主義革命を当面の目標としながらも、結局はそれを「過度的」なものとしその担い手を労働者階級とした。丸山真男は近代主義の代表者であるが、彼は日本戦後の民主主義確立に向けて一貫して思想営為を続け、近代主義とマルクス主義の接点をぎりぎりのところまで接合しようとした思想家である。市民社会論の視点からみれば、丸山は歴史の進歩を、全体として前近代—近代—超近代における民主主義と市民社会の発展と捉えていると、吉田氏は考察した。つまり、丸山は国家を民主化しそれを市民社会に再吸収する立場を採ったのであり、丸山の「主体的」思想がマルクス主義の「客体的」思想と結節すれば、その規範的民主主義・市民社会論は、戦後思想の領域を超えてより大きい歴史的意義をもつと、吉田氏は高い評価を与えた。さらに、氏は、「市民社会派マルクス主義」の代表する平田清明、望月清司、森田桐郎の市民社会論及びマルクス主義を代表とする見田石介、林直道の市民社会論を紹介し評論した。

以上を要約すれば、われわれは、吉田氏の後期市民社会論研究が膨大な理論的作業であり、また大きな業績であることが判る。マルクスの重層的市民社会論の理論的再構築は、日本を超えて世界中のマルクス思想研究にも大きい啓発を与えるであろう。また、現代世界を席捲する市場至上主義的グローバリズムとその対をなす国家主義的ナショナリズムに直面して、吉田氏の〈市民自立〉を企

図する意図は重大な実践的意義をもつといえよう。

人は誰でも自分の夢を追求する人生を送っている。学者にとっての夢は真理であり、真理を探究するのはその最高の価値といえる。吉田傑俊氏は三十余年の研究生活で真理を夢として追求してこられ、マルクス主義哲学や日本思想史、戦後日本の哲学・倫理学・社会思想史などの分野で大きな研究成果をあげた。

(下 崇道・石坂悦男)

【注】

- 1) 吉田傑俊・尾関周二・渡辺憲正編『ハーバマスを読む』大月書店、1995年、195ページ。
- 2) 同上、218ページ。
- 3) 吉田傑俊『マルクス思想の現代的可能性』大月書店、1997年、11ページ。
- 4) 吉田傑俊『市民社会論——その理論と歴史』大月書店、2005年7月、53ページ。

付記：吉田教授の1990年代以降の主要著作には他に、『現代民主主義の思想』（青木書店、1990年）、『知識人の近代日本』（大月書店、1993年）、『マルクス思想の現代的可能性』（大月書店、1997年）、『国家と市民社会の哲学』（青木書店、2000年）など、また編著に『「共生」思想の探求』（青木書店、2002年）、『アーレントとマルクス』（大月書店、2003年）などがある。本稿は筆者以外の研究者の協力に負っている。(二)「唯物論の現代における意義と方法」は、高淑娟「吉田杰俊」(所出、下崇道他編『当代日本哲學家』中国科学文献出版社、所収)を日本語に訳し(董素娥訳)石坂が編集した。(三)「新しい市民社会論の構築」は下崇道の草稿をもとに石坂が加筆・補正したものである。関係各位のご協力に深く感謝する。

なお、高淑娟氏は中国・清華大学人文学院教授、下崇道氏は元中国社会科学院哲学研究所・同研究生院教授、現浙江樹人大学教授である。